尊攘堂

尊攘堂の名は、子爵品川弥二郎が吉田松陰の遺志をくんで1887（明治20）年に高倉通錦小路に創設し、維新における尊攘の功ある人々を記念したものに由来する。現在の建物は、品川の死後本学に寄贈された松蔭の遺墨類をおさめるため、1903（明治36）年に建てられた。外装を化粧した煉瓦造平屋建・寄せ棟屋根の擬洋風建築 とよばれる建物で破風付きの窓、小屋根、切妻のポーチなどの洋風要素を配している。また内部は、扁平なアーチをもつ一段高い小室が奥に控える左右対称平面で、中央広間の天井をめぐる漆喰装飾と照明の唐草装飾とがあいまって、華やかな印象を醸し出している。

現在、尊攘堂は文化財総合研究センターの資料室として、大学構内における埋蔵文化財調査成果の保存・展示に使用されている。品川弥二郎による志士の遺墨・遺品などの寄贈資料は、維新特別資料として京都大学附属図書館に収蔵・保管されている。

尊攘堂　京都大学文化財総合研究センター・資料展示室

京都大学構内の主な遺跡

縄文時代

遺構

縄文時代中期末の竪穴住居跡（北部構内）

方形の石組炉を中心に隅丸方形状の溝がめぐる中期末の竪穴住居跡。炉が中央に存在していたとすれば、一辺約5mとなる。溝に囲まれた区画には9個の土坑が検出されており、そのうちのいくつかは柱穴に相当する。

現地に埋め戻し保存されており、北部構内・農学部総合館北側にパネルを建ててその位置を示している。

縄文時代後期の配石墓（北部構内　植物園内）

人頭大の自然石 20 ～ 30 個を円形ないし楕円形に密集させるものと、10 数個の自然石を不定形に敷きつめたものとに大別される。甕を埋納したものや土壙を有するもののほか、骨片が検出されたものもあり、出土地点の東に隣接する理学部植物園内に移築をして復原保存をおこなった。

低湿地に残る埋没林（北部構内）

縄文時代晩期の低湿地に残った埋没林。樹種の分析によって、湿地に強いトチノキ・ムクノキ・カエデ属のなかに、常緑広葉樹のアカガシ亜属や針葉樹のカヤが相当量混交していた様子が明らかとなった。周辺では、ヒトなどの動物の足跡が無数にみつかっており、当時の生活環境を自然科学的分析を通じて検討した事例である。

遺物

縄文土器・深鉢（後期）（病院構内）

口径 25 ㎝、器高 16.2 ㎝をはかる小型の深鉢。口頸部が外反し、口縁端部を短く内側へ折り曲げる。口縁端部直下に刻目隆帯を横走させ、8字状浮文を貼り付ける。口頸部には沈線で三角文と逆三角文を描き、2段左撚りの縄文を充填している。

縄文土器・深鉢（晩期）（病院構内）

口縁部を縁帯状に肥厚させた、縄文晩期の特徴的な土器。胴下半以下を欠損するが、口径 34 ㎝、推定器高 36 ㎝前後になる深鉢である。

弥生時代

遺構

弥生時代前期の水田跡（北部構内）

弥生時代前期の水田遺構。水田域は、ゆるやかに高まる空閑地をはさんで東西の2つにわかれ、平坦地を広面積に確保できない条件での土地利用をうかがうことができる。細長い小規模の区画を整然とならべて造成されている。

弥生時代前期末の土石流（北部構内）

弥生時代前期末に、比叡山南半の花崗岩地域からもたらされた土石流の痕跡。土石流堆積物である黄色砂層は、北部構内を中心に吉田キャンパスの多くの地点で確認されている。堆積土砂量の総計は 70 万m3におよぶ。黄色砂には2mを越えるような巨礫も含まれており、規模の大きさを知ることができる。

遺物

弥生土器（中期）（北部構内）

方形周溝墓に供献された広口の壺。器高 34.5 ㎝、口径 19.0 ㎝、胴部最大経 25.2 ㎝。頸部と胴部に直線文を描き、文様帯と胴部の張り出し部分を研磨して仕上げている。器壁や底部が比較的厚く、文様帯を頸部と胴部に描きわけるなど、弥生中期でも古い段階の要素が強い。

弥生時代後期の銅鏃（右）と中期の磨製石鏃（左）（本部構内）

銅鏃は、先端や裾部などを欠き、残存長 3.8 ㎝。全体に強く研磨されて丸みを帯び、中央に鋳造後にあけられた径5㎜の穴が特徴的。こうした形状の銅鏃は、弥生後期の東海地方に多く出土し、近畿地方では珍しい。同じ地点では、中期の磨製石鏃も出土している。いずれも中世の堆積層や遺構からの出土品だが、近傍に弥生中期や後期の遺跡の存在がうかがわれる。

古墳時代・古代

遺構

古墳時代中期の方形墳（吉田南構内）

二重の周濠がめぐる一辺 10 ～ 13mの方形墳。 5世紀末から6世紀初頭の年代で、 近接した地区に同様な方形墳を他に5基検出しており、 未発見の古墳の存在も予想されている。

奈良時代の石敷製塩炉（8世紀後半）（和歌山県瀬戸遺跡）

火熱のために赤色や赤紫色に変色した石が、 東西 1.4m、 南北 1.5mの範囲で密にならぶ。 付近の土器溜からは、 円筒形の胴部と尖り底ないし尖り気味の丸みをもった器形の製塩土器がみつかっており、 南紀を代表する製塩遺跡となっている。

平安時代後期の経塚遺構（吉田南構内）

平安後期の経塚は、 九州地方に分布する青銅製の四段積上式経筒を用いた珍しい事例である。 石室内に経筒を納めたものとみられ、 台座裾部の径 13 ㎝。 台座内部からは 150 個以上のガラス玉も出土した。

遺物

古代の土器・陶器（9世紀後半）（北部構内）

幅1m弱、 長さ 28mの東西溝の西端から集中して出土した9世紀後半の土器・陶器。 これらのなかには、 東海産の緑釉陶器や灰釉陶器の優品、 白色土器三足盤といった特殊な器種もふくまれており、 貴族の別業や寺院との関係が推測される。

火舎（11～12世紀）（病院構内）

器面にわずかに金粉がのこる佐波利製の火舎。 平安時代末の製品と考えられる。 火舎とともに佐波利製の六器が一点出土しており、 なんらかの密教法会がおこなわれたのだろう。 11 ～ 12 世紀にかけて白河地域に展開した、 六勝寺や院御所との関連が注目される。

中世

遺構

中世の火葬塚（復元）（北部構内）

平安時代末から鎌倉時代に築造された火葬塚。一辺 15mの溝の内側に 7.8m四方の溝を掘り、内部に底面 4.8m四方、上面 3.0m四方の正四角錐台状の土壇を設ける。火葬塚は、埋葬地である陵墓や火葬墓とは異なり、火葬所を記念して築いた塚のことである。埋め戻して現地保存をし、その上に復原をおこなった。

中世の梵鐘鋳造遺構（医学部構内）

鉄製の梵鐘を鋳造した 13 世紀前葉の遺構。鋳造時の原位置をたもつ内型（外径 30 ㎝、残存高 15 ㎝）と、その周辺に散乱する外型からなる。鋳造坑を検出できなかったことから、鋳造時には内型が地表面上に設置されていたと考えられる。この遺構はすべて調査後取り上げて保存した。

遺物

黄釉陶器鉄絵の盤（13世紀中葉）（本部構内）

13 世紀中葉ごろの廃棄土坑から出土した陶器の盤。口径 34 ㎝。下地に黄褐色の釉を厚くかけ、口縁部と内面に鉄絵の装飾を施す。中国福建省泉州の晋江県磁竈窯の生産品とみられ、長寿を祝う「福海壽山」の文字を描いている。日本に将来された資料としては類例が少ない逸品である。

漆器の椀（13世紀後葉）（医学部構内）

13 世紀後葉ごろの井戸の底部から出土した漆器の椀。土圧でつぶれながらも7割ほどが残存する。黒色漆の地の内外面に赤色漆で竹笹の文様を端正に描いている(写真は底面側)。出土した一角は、勧修寺流藤原氏など貴族の邸宅や堂舎の推定地にあたり、当時の貴族の嗜好をうかがうことができる。

近世・近代

遺構

土佐藩邸の南限を画する堀（北部構内）

慶応4（1868）年刊の『改正京町御絵図細見大成』には本学北部構内にあたる場所に「土州屋敷」（土佐藩屋敷）が描かれている。1992年度の発掘調査では、この幕末土佐藩邸の堀や藩邸内の井戸がみつかった。

写真はその土佐藩白川邸の南限を画する堀。幅 2.9m、深さ 0.9 ～ 1.1m の東西溝で、黄色砂を掘りこんで造られているため水はたまりにくく、空堀であったものと考えられる。

堀から出土した桟瓦の刻印（拓本）

堀からは大量の桟瓦が出土しており、これらは刻印から土佐で生産されたことがわかっている。

遺物

乾山焼・陶片（18世紀中葉）（病院構内）

享保 16（1731）年ごろ、尾形乾山が江戸へ下向したのち、京では養子・尾形猪八が2代乾山を名乗って、聖護院門前で乾山焼を継いだことが初代乾山著『陶磁製方』にみえる。2001（平成13）年の発掘調査で、写真に掲げた乾山銘をもつ陶片や窯片が多数見つかった。製品には高火度焼成品、低火度焼成品ともにある。文献にみえる聖護院窯の実態をしめす考古資料である。

三高・京大関連遺物（19世紀後葉～20世紀前葉）（本部・吉田南構内）

発掘調査では、第三高等学校や帝国大学時代の遺物もしばしば出土する。「第三高等学校」と呉須で筆書きした茶碗は吉田南構内、それ以外は本部構内から出土した。図案化された大学マークをもつ土瓶・茶碗は、底に「本」の銘をもつことから本部で、「法」のマークをもつ土瓶は法学部で使用されたことを示している。これらは、地元・清水焼の窯元による注文生産品である。